

学会報告

- (17) 2018 年 11 月 04 日 アートミーツケア学会東京大会 於京都市立芸術大学
口頭発表（兼子）
「エンパワメント型アートセラピーの評価方法・評価基準について：自己評価は有効か？」
- (16) 2018 年 09 月 02 日 第 13 回日本社会理論学会 於愛媛大学
口頭発表（兼子）
「『アート・エンパワメント』概念の理論的可能性とその検討：鶴見俊輔『限界芸術論』から見る
社会・文化・芸術的位置」
- (15) 2018 年 06 月 03 日 第 69 回関西社会学会 於松山大学
口頭発表（兼子）
「「アート」に何を見るか？：実態調査が示すアートとエンパワメントの関係性」
- (14) 2017 年 12 月 17 日 アートミーツケア学会京都大会 於京都市立芸術大学
口頭発表（兼子）
「エンパワメント型アートセラピーの可能性と展開にむけて」
- (13) 2017 年 11 月 04 日 第 90 回日本社会学会 於東京大学
口頭発表（小村・石原）
「エンパワメント型アートセラピーの構成要件と評価方法：その適用範囲と可能性」
- (12) 2017 年 11 月 03 日 第 90 回日本社会学会 於東京大学
口頭発表（兼子）
「エンパワメント型アートセラピーの社会的構築：心理療法・芸術諸学・エンパワメント科学と
社会学との対話」
- (11) 2015 年 11 月 29 日 第 47 回日本芸術療法学会 於目白大学
口頭発表（兼子・小村・石原）
「『エンパワメント型アートセラピー』の可能性と課題：構成要件の解明と評価基準の開発にむけ
て『エンパワメント』概念を考える

(10) 2015 年 09 月 19 日 第 88 回日本社会学会 於早稲田大学

口頭発表（兼子・小村・石原）

「エンパワメント型アートセラピー活動をどう育てるか：構成要件と評価基準の確立にむけて『エンパワメント』のあり方を問う

(9) 2014 年 11 月 29 日 第 46 回日本芸術療法学会 於名古屋大学

口頭発表（兼子・石原・小村）

「アートセラピーの全国実態調査」

- （１）日常生活圏域に拡がるアートセラピー活動の現状について
- （２）コミュニティを支えるアートセラピー：社会資源としての可能性と課題
- （３）アートセラピーをエンパワメント活動として再定義する

【内容】市井のアートセラピー活動の拡がりと意義と課題を周知することを念頭に、これまでの研究成果を報告した。要旨は報告(6)を参照。

(8) 2014 年 11 月 22 日 第 85 回日本社会学会 於神戸大学

口頭発表（石原・小村・兼子）

「アートセラピーの全国実態調査」

- （１）一調査結果の概要と分析一
- （２）一内発的かつ自律的に展開する市井のアートセラピー活動一
- （３）一ソーシャル・ベンチャー(社会的起業)としての持続可能性と課題一

【内容】アートセラピーについて周知させることを念頭に、これまでの研究成果を報告した。要旨は報告(6)を参照。

(7) 2014 年 9 月 27 日 宗教社会学の会・定例会 於大阪国際大学

口頭発表（兼子）

「ありのままの自分になるの♪ ―アートセラピー全国調査から見える現代の『自己のテクノロジー』について―」

【内容】市井のアートセラピーで目指されることの一つが「ありのままの自己を肯定し、人間性・主体性を回復すること」である。これは 2014 年に大ヒットしたディズニー映画『アナと雪の女王』の「Let it go（レリゴー）」に象徴される現代社会の現象に呼応している。そのあり方は、心理カウンセリングに基づくセラピー文化に根ざしたものというより、エンパワメントと見なした方が適切に思われ、新しい社会運動としてとらえることも可能である。

(6) 2014 年 9 月 30 日 第 127 回日本社会分析学会・例会 於九州大学

口頭発表（兼子）

「アートがもたらすエンパワメント（*）の意義 ―『アートセラピーの全国実態調査』から見える姿―」

(*)この時点では「エンパワメント」としていたが、近年は「エンパワメント」と表記する流れにありそれに従う。

【内容】市井で展開されるアートセラピーをより積極的に「エンパワメント」として捉えることを試みた。市井のアートセラピーは、医療サイドのアートセラピーを起点としてそれが他領域に応用・拡大したというよりも、アートが本来持つセラピューティックな機能に基づき、実践の中から内発的・自律的に展開したものと説明できる。つまり病圏の患者に対する療法とは、その目的や存立基盤が異なる。既存の制度や枠組に囚われない自由なアートセラピー活動は、各現場に即した成果を得ており、今後の展開が望まれる。しかし、回答者の約 8 割がボランティアベースの活動であり、職業としての成立が困難で、活動の持続可能性の阻害要因となっている。新たな担い手が育成され、活動が継続・発展していくためには、アートセラピー活動の意義や効を示す指標・尺度の整備、職業適性に関する議論や人材育成の整備など、この活動を社会資源として位置付ける方策が必要である。

(5) 2014 年 3 月 19 日 同志社大学人文科学研究所 第 18 期 第 11 研究 2013 年度 3 月研究例会 於同志社大学

口頭発表（石原）

「アートと社会のオルタナティブな関係ーアートセラピーの全国実態調査よりー」

【内容】アーティストやキュレーターなどが介在するいわゆる「アート」（作品化を目指すもの）が地域社会や実際の生活に関与し、関係していくあり方と、アートセラピーの社会との関係の仕方の相違を比較し、（作品化を目的としない）アートのあり方、アートの力、社会における意味を考察する。

(4) 2013 年 11 月 23 日 甲南アーツ&セラピー研究会 於甲南大学人間科学研究所

口頭発表（兼子・石原・小村）

「『アートセラピーの全国実態調査』中間報告」

【内容】我々の調査研究の概要と調査方法、2013 年 4-5 月のアンケート調査および 6 月開始の事例調査（インタビュー調査）の成果について、中間報告を行った。個々の活動家のユニークさや異なるあり方が、アートセラピー概念を広げるものであり、調査研究への期待が高まった。

(3) 2013 年 5 月 19 日 第 64 回関西社会学会 於大谷大学

口頭発表（兼子）

「『なんちゃってアートセラピー』考ーアートセラピーの全国実態調査よりー」

【内容】日常生活に広がる気軽なアートセラピーの非専門的＝非医療的な側面に着目して「なんちゃってアートセラピー」と挑発的に名付け、その実態と有効性を示し、社会的な位置付けを行った。

(2) 2013 年 3 月 2 日 日本社会理論学会研究例会 於滋賀大学

口頭発表（兼子）

「現代社会におけるアートとセラピーの親和カーアートセラピスト実態調査から見えるその位相ー」

【内容】先行調査および我々のプレ調査をもとに、日常生活に近い「アート」と「セラピー」とが結びつく様を分析し、市井のアートセラピストの社会起業家としての活動形態の典型を示した。

(1) 2012 年 11 月 3 日 第 83 回日本社会学会 於札幌学院大学

ポスターセッション報告（兼子・石原）

「標準化と再魔術化のはざままで ―アートセラピストへの全国調査より―」

【内容】我々の調査研究のベースとなる甲南大学人間科学研究所の先行調査の成果を分析し、今後の調査 研究の布石とする。

※タイトル、内容説明に使用している用語は、発表当時のものである。